

中国農業経営における労働力利用

——四川省の現地調査に基づいて

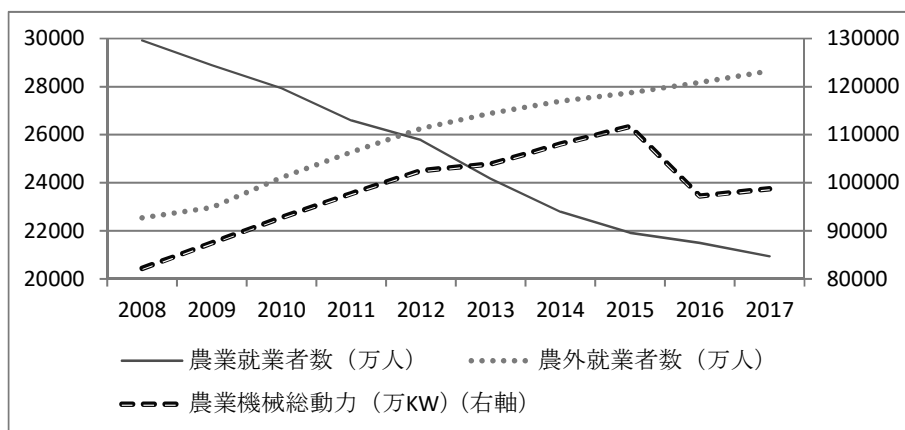
范 丹

I はじめに

中国農業は現在大きな転換点を迎えていると言える。大きな背景として、以下三つの面が挙げられる。一つ目は農業従事者数の減少と農外就業人口の持続的な増加である。改革開放以来、戸籍制度の緩和により農民の自由流動が始まって、都市部の工業化による大量な農外就業が発生してきた。一方、内陸部における農家経営も大きな変貌を遂げている。農家は変容しつつある農業生産を営みながら兼業や特化した専業などの多就業状態で農家経営を行っている。農業生産の担い手として、かつて日本で言われてきた「三ちゃん農業」のように、中高年の男性と女性が主となっている。それと同時に、図1で示したように、農業機械総動力も増加する一方である。

二つ目は新型農業経営主体の増加と経営規模の拡大傾向にある。近年、様々な政策文書のなかで、中央政府が新型農業経営主体と適度な規模による農業経営の持続的発展を促進

図1 農業と農外就業人口の変遷（2008－2017）



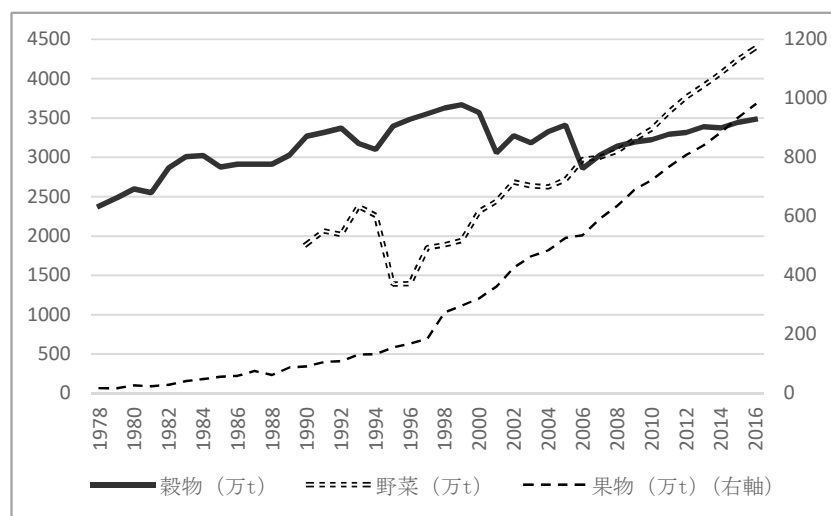
出所：農業就業人口と機械総動力は『中国統計年鑑』（各年度）より、農外就業人口は「農民工」（外出と地元を含む）の数であり、『農民工監測調査報告』（2012、2014、2017年度）より。

しようとしていることがわかる。全国のデータから見れば、35.1%の土地が貸借により集中されている¹が、ほぼこれらの新型農業经营主体によって耕作されている。2016年第三次農業センサスによれば、農業経営体の数は20743万戸であり、そのうち大規模な農業経営体は398万戸に上る²。

三つ目は所得増加により国民の食品需要構造が著しく変化してきたことである。野菜や果物の青果物の需要量も高品質に対する要求もますます上昇しつつある。2018年の中国共産党第19回全国代表大会で初めて郷村振興戦略が提起された。この後の中央経済工作会议では郷村振興戦略の実施を重点的な任務と定め、中央農村工作会议³は郷村振興戦略に焦点を当て、システムティックな郷村振興戦略実施の目標、任務、原則、手段と方策を打ち出した。党大会では、新時代における主要な社会矛盾はすでに、人民の日増しに増大するよりよき生活に対する渴望と不均衡・で不十分な発展との矛盾だと指摘している。ここでいう、「よりよき生活への渴望」には、高品質な食品に対する需要も当然含まれており、それに満たすことは急務となっている。

図2は農業大省である四川省の主要農産物の生産量の推移を示している。そこから、以

図2 四川省主要農産物生産量（1978－2016）



出所：四川省統計局、『四川省統計年鑑』各年度、『新中国農業60年統計資料』より。

- 1 中国農業部 2017 年 9 月 19 日の「關於加快構建政策体系培育新型農業經營主体的意見」のなかで「中国の2億3000万戸の請負農家がすでに4.79億ムーの請負地の經營権を他者に移転しており、それは第2次請負面積の35.1%を占めている」と記載されている。 <http://www.moa.gov.cn/hdlim/zbft/jknyfzscxsfw/>。
- 2 国家統計局、第三次全国農業普查主要数据公報（第一号）。 http://www.stats.gov.cn/tjsj/tjgb/nypcgb/qgnypcgb/201712/t20171214_1562740.html。
- 3 中央農村工作会议は毎年年末開かれるが、翌年の農業にかかわる最も重要な任務がその会議で決められる。「中央農村工作会议在京召開」『人民網』、2018年12月30日。 <http://politics.people.com.cn/n1/2018/1230/c1024-30496635.html>。

下の点が指摘できる。まず、1996年以前は重慶市を含めた数値であるが、全体として穀物を中心とした食糧の生産量は横ばいないしやや減少する傾向にあること、そして、野菜と果物はすべて右肩上がりで増加する傾向を示している。

Ⅱ 問題の提起と既存研究

農業の生産性を向上させるためには二つのアプローチがあると今まで議論されてきた。一つは人手による作業を機械によって代替すること、もう一つは社会的サービスで小規模農家を支えていく道である。「縦の分業」と「横の分業」という議論もなされてきた（羅必良, 2017）。

近年、農業における専業従事者数の減少は大きなトレンドとして確認されており、背景には、前述したように、農外就業の増加と人口の高齢化などの原因が存在している。

専業で農業に従事する人数の減少は農業生産労働の担い手の変化を引き起こす。農業生産労働には、以下の特徴がある。まず、植物や生物の生育期間が長く、その過程において多種多様な仕事をこなさなければならない。そして、生物の生育に合わせて、限られた期間内に作業をする必要性がある。さらに、投入された労働の量と質は容易に顕在化されないことがある。とくに耕種農業の経営耕地面積が大きいほど、作業に対する評価や労働者を監督するモニタリング・コストが高いのは事実である。それゆえ、「家族」はこの監督コストがかからない形態として、経営効率が一番高いと言われている。

改革開放期の中国で人民公社が撤廃されたのは、「家族経営」の効率性を重視した結果であるとされている（林毅夫, 2008）。清の時代に、長江デルタに出現した経営式農場がその後衰退したのも「家族経営」が強い生命力を持つ証拠だとされている（黄宗智, 1990）。すなわち、「家族経営」の方が、雇用を伴った経営式農場である集団経営よりも効率がよく、労働調整コストが低いことから、外部環境への適応力が優れていたとされた。そこで、経営主体としての「家族」の重要性が強調されている。黄宗智は家族世帯員自身の労働力にだけ頼ることをメインとする、家族農場論（Family-farming）を提起している。

しかし、農業という産業は、農繁期と農閑期があるため、労働力の需要に季節性を有する産業である。従来の農業生産には、ゆい・手間替え、日雇、臨時雇用、短期雇用などの形態が存在していた。とくに、田植や収穫作業などの時期に、大量の臨時雇用と短期雇用が家族労働力の限界を補完する性格を持つ。

そこで、現行の政策の中では「誰が農業をするか」（誰来種地）という問題はしばしば関心を集めており、様々な打開策が言及される中、最も多く言及されているのは新型農業経

営主体であり、これが将来の農業生産の担い手として期待されている。その内の一つである「家庭農場」に関しては、特に労働力利用の点をめぐって、議論が盛り上がっている。家庭農場とは「家庭労働力を中心に使用する」という制限があると本来の政策上には定められている（袁賽男，2013；郭熙保，2015；趙佳，2015）。一方、家庭農場の実際の経営においては、「非家庭経営」という性格も現れていると主張する研究者もいる（尚旭東，朱守銀，2015）。家庭農場が実際にどのように労働力を利用しているかは議論の焦点になっているにも関わらず、その実態を解明した研究は未だに少ない。

中国の農業が、全体的に人口の減少、大量な農外就業、住民の収入増加による消費増加など三つの歴史的転換点を迎えているという判断（黄宗智・彭玉生，2007）を踏まえて、もう一つ解明しなければならない事実は、規模拡大した農家または新型農業経営主体による新しい農業経営の現状である。すなわち、現在の小規模農家と大規模農家ないし経営主体はいかに生産を行っているのかという「誰が農業をしているか」（誰在種地）という問いに答えたい、とりわけ「誰がどのように農業労働に従事しているのか」について、この点はどのように農業生産が行われるかと誰が実際に農業生産を行うかの二つの問題に関わってきている。本稿では、労働力利用の視角から、詳細な現地調査資料を用いてその問題を解明したい。

Ⅲ 現地調査による事例分析

四川省は中国南西地域に位置し、古くから全国的に有数な農業大省であると共に、膨大な人口を抱える省でもある。2017年に、四川省の総人口は全国4位であり、農業総生産も4位である。穀物生産量は全国5位であるが、肉類生産量は全国2位を占めている。

1. 家庭経営による生姜栽培

（1）生産プロセスの把握

前節でみた四川省の農産物生産量の変遷から、野菜への需要が高まっていることが推測できる。本節では樂山市の冠英鎮の生姜農家における労働力の利用状況を報告する。冠英鎮は、樂山市のなかでも野菜と果物の生産地として知られているが、なかでも生姜の生産が盛んである。生姜栽培の経験が豊富なベテラン農民によると、生姜は高価だが、その栽培には複雑な過程を経て、非常にコストと手間がかかる。いくつかの段階で、品質と収量を向上させるために、適切な時期に作業を行う必要があり、かつ、手作業が多いことか

ら、労働力の需要に特徴がある。以下、生姜栽培農家 S 氏の事例を詳しく取り上げて分析することにより、大規模農家の農業生産の実態の解明を試みる。S 氏に対する聞き取り調査は 2012 年 6 月に行われた。

S 氏への聞き取り概要は以下の通りである。S 氏は 2003 年から生姜に特化した生産を始めた。調査した時点では、23 ムー（1.54ha）の規模を経営している。その内、1.5 ムー（10a）だけが自家 3 人分の家族請負土地であり⁴、ほかは全部近隣の人から借りた土地である。1 ムー当たりの地代は、年間 400 キロの米価に相当する金額と定められている。例えば、調査時（2012 年）の米価は 1 キロ 3.4 元であったため、1 ムーの耕地の年間地代は 1,360 元であった。

S 氏のように、借地して農業を営む場合、自家の請負地として分配された土地だけは地代がゼロであるが、残る土地に対しては地代が発生するために、輪作などによって土地生産性を上げる方法を採用しなければ経営が成り立たない。

S 氏は、生姜以外に水稻、ナタネ、小葱の輪作を積極的に行っている。S 氏の経営作物から分かるように、S 氏の農場では一年中絶えず農繁期が生じる。頻繁に訪れる農繁期に必要な人手への需要が大きい。耕作機械も導入されたものの、水田や畑を耕すときだけ使われており、ビニールハウス内の野菜生産の作業は基本的に手作業になる。

さらに、市場向けの「商品」を生産しているため、市場における価格や需要量といった変動に農家経営が大きく左右される。それは生姜の収穫と出荷に最も反映している。以下では、S 氏の事例から生姜栽培の生産過程とそれが必要とされる労働力とコストを具体的に分析していく。

（2）労働力利用の現状

表 1 から分かるように、生姜栽培には、大まかに 7 つの生産工程が存在している。経営主である S 氏は全ての工程において管理を行っているが、主に② 11 月に種を購入、選別、貯蔵する作業と⑥翌年の 4 月の中間管理を担当しているという。それは作業内容から一人でできることが原因の一つであるが、最も重要なはいずれも技術が求められる作業であるからである。栽培技術に関する面は、直接に生産量と質に関連しているので、S 氏によれば、「私は生姜栽培の本を買って勉強しました。（中略）多くの段階において技術は大事です。たとえば、肥料を撒くことも、殺菌することも天候や温度によってその用量と時期が変わってきます」⁵という。

一方、現金による投入も決して少ない金額ではない。種子代金が最も多く、1 ムー当た

4 S 氏が住む冠英鎮 R 村 8 組では、1 人当り耕地面積は 0.5 ムー（3.4a）しかないという。

5 S 氏に対するインタビュー調査資料による。

り 6,450 元であり、その次にかかるのは労働者を雇用するコスト 4,700 元であり、この二種類の支出の合計金額は 11,150 元である。それは全体コストの 88%を占める。

こうしてみると、技術と労働と資金をすべて大量投入している点は、黄宗智の主張する「家族農場」のモデルに一番近いと考えられる。その特徴は、農家世帯がその経営主体であるほか、高価格の農産物を資本と労働の双方を大量に投入して生産する「新農業」であるという点にある。しかし、黄宗智が分析した家族農場と大きく異なる点は、労働力調達のための雇用労働の導入の有無に関する点である。黄宗智は完全に家庭内部の労働力に依存して農業生産を営み、世帯内部での就業を最大化することにより 1 人当り所得を最大限にするやり方を強調し、他人の労働力を雇用することまで考えていないようにみえる（黄宗智, 2010）。しかし、実際に S 氏のように借地によって経営規模を拡大した農場において、他人の雇用労働はどれぐらい必要になっているのだろうか。以下 S 氏の事例から労働力の利用について分析する。

表 1 から分かるように、栽培過程の主要な 4 つの工程①、④、⑤、⑦において、それぞれかなりの数の短期雇用を導入する必要があった。この地域では、「包工隊」と呼ばれる専門的な組織が形成されており、この地域の収穫作業の受託を全面的に行っていた。実際、S 氏のところでは、生姜の生産工程における最後の「収穫」の段階には、「包工隊」の斡旋により、30 人から 50 人以上もの人員を雇い入れていた。そうした「包工隊」のメンバーは全員近隣地域に住んでいる農民たちであった。彼らは主に 30 代から 50 代の女性を中心となっており、中高年の男性も含まれていた。つまり、規模を拡大した農家では、家族労働力以外に、多くの雇用労働を使用する必要があるとすることができる。

表 1 S 氏の生姜栽培の生産過程とコスト (1 ムー・6.7a 当り)

作業工程の内容	労働力利用	コスト
① 11 月・耕起 3 回、同時に肥料を撒く	毎回 3 人で一日（短期雇用）	作業料金 300 元、肥料代 960 元
② 11 月・種を購入・選別・貯蔵	経営者 S 氏自分で購入・選別 1 人一日	種子代金 6,450 元
③ 1 月・種を乾燥する	1 人で 25 日間～30 日間	燃料代 300 元
④ 2 月・播種	5 人で二日間（短期雇用）	作業料金 1,200 元
⑤ 3 月・中間管理（翻箱）	6 人で一日（短期雇用）	作業料金 700 元
⑥ 4 月・中間管理（殺菌、殺虫 4, 5 回）	経営者自分で作業をする	農薬代金 200 元
⑦ 5 月 /6 月・収穫	30 人～40 人で 2 時間 （短期雇用）（作業委託）	収穫量 × 1.0 元 /kg 1 ムー当り平均 2,500 元
合計	延べ 56 人・日 + 作業委託	12,610 元

出所：2012 年に四川省樂山市五通橋区冠英鎮でのインタビュー調査の記録資料より筆者作成。

「包工隊」のメンバーである農民はそれぞれ自分でも2～5ムー程度の土地を請け負っている。その土地を大規模農家に貸している人もいれば、そこで自家用の穀物と野菜を栽培している人もいる。さらに、自家で販売用の生姜や野菜などの経済作物を作っている人もいる。いずれの場合も、自家での経営規模が小さくてそこで必要な労働時間は短いのので、「包工隊」に入って大規模農家のもとで働くことができるのである。実地調査によれば、こうした農民の収入源は自家での農業、出稼ぎしている家族からの送金、大規模農家のもとで働くことで得た賃金からなる。大規模農家から得る賃金は各種の統計から漏れることが多く、実地調査以外の方法で把握することは難しい。

続いて、この種の農家はどのように市場と結びついているのかを、販売のプロセスに注目してみよう。ここでは、表の「作業工程」項目における⑦「収穫」について検討することで、農産物の収穫と販売を通じて農家と市場が如何に結びついているかという問題を明らかにしたい。

生姜の収穫時期になると仲介人が畑にやってくる。仲介人は農産物を買上げてから、卸売市場へ運搬してそこで販売する。この地域には、T氏という地元出身の仲介人⁶がいて、2012年6月の調査時にS氏の生姜を全て買い取ったのはT氏であった。その具体的な過程は以下である。

こうして、広域市場での流通を目的とした商品生産の収穫・出荷作業は非常に効率的に

表2 生姜の生産から販売までのプロセス

-
- ①T氏が地域の生姜畑を選別し、どの畑のものを買うのかを検討。
 - ②S氏の畑が選ばれて、T氏とS氏の間で、値段交渉に入る。
 - ③T氏が出荷準備の運送車、積み込む人手などを準備。そして、重慶にある卸売市場の買い手と連絡し、出荷時間を確認。
 - ④出荷時間を告知されたS氏はY氏に連絡する。なお、Y氏は先ほど言及した短期雇用労働者からなる「包工隊」のリーダーである⁷。
 - ⑤出荷当日、Y氏を含む30人から50人のグループがS氏の畑に集合、そして、2、3時間後に、掘り出された生姜は分別、洗浄、計量、箱詰め等の作業を経て、トラックに積み込まれる。
 - ⑥場合によって、6時間後に重慶の中間卸売市場で流通するか、さらに成都を経由して航空便で広州の卸売市場で流通するかのいずれかになる。
-

出所：聞き取り調査より。

6 同地域には仲介人が数人いる。そして、地元出身ではない仲介人も交渉しに来る。T氏は1969年生まれの中年男性である。T氏は1986年からこの地域の生姜などの野菜販売の仲介の仕事に携わり始めた。最初のころには、1斤（重量単位で、500gである）あたり3分（0.03元）、5分（0.05元）、多くては1角（0.1元）の仲介料を取るという。T氏の話では、1998年～2008年までの時期、仲介人として仲介手数料を取ることができたが、2008年の政府の規制によって仲介人が取り締まれたため、現在では仲介ではなく、自分自身が作物を買って卸売市場で販売するようになっている。

7 「包工隊」の隊長と呼ばれている。

行われている。野菜類の生産は穀物類と異なり、収穫時に手作業が多く、作物が傷みやすいために繊細な細かな手作業が必要とされる。それゆえ、ある程度大きな生産規模（例えばS氏の23ムー）に達しても、機械の導入には限界がある。さらには、作物の新鮮さを保つために、収穫時の農作業は迅速に行なわれなければならない、厳しい時間管理が求められる。こうした中で、生姜生産農家と仲介人は「市場」の要求に応えるように常に対応しなければならない。

このS氏の事例から分かるように、大規模農家は商品生産を目的とし、資本と労働と技術を大量に投入して生産を行っている。小規模経営農家との相違は、借地による規模の拡大と、短期雇用や作業委託を利用した雇用労働の導入が多いという点にある。

以上、借地経営で規模拡大を実現した農家という専業農家の事例を取り上げて考察してきた。次には、特化した専門農家による葉たばこ栽培がどのように行われているのかを考察する。

2. 特化した専門農家による葉たばこ栽培

経済作物の一種として、葉たばこは中国各地で長く栽培されている。葉たばこ栽培農家は相対的所得が高いこともよく知られている。とはいえ、近年、労働コストの上昇が葉たばこ栽培に大きな影響をもたらしていることも全国の統計データと現地調査から分かる。本節では、全国は葉たばこの生産コストに関する統計資料よりマクロ的に状況を把握した上で、現地調査による生産工程の確認そして労働力利用の実態を明らかにしていく。

(1) 全国の葉たばこ生産コストに関する統計分析

表3では農産物のコストと収益に関する統計を2007年から2017年について整理したが、人件費が上昇しつつあり、十数年前の600元台から現在の2000元以上にのぼり、2013年以降は総コストの6割以上を占めている。作物にかかる「手間」に反映する人件費比率の上昇が注目されるべきである。

この点は明らかに穀物生産とは大きく異なっている。葉たばこも前述した生姜栽培のように、生産工程の各段階に人手が多く必要で、機械では容易に代替できない。

(2) 機械化と品種改良による生産過程の変化

葉たばこの栽培には、複雑な生産過程がある。古くからの栽培ノウハウを生かしながらも品種改良や機械導入などにより、生産プロセスが変わりつつある。2018年5月～9月の間、四川省徳陽市及び宜賓市で葉たばこ生産に関する現地調査を行った結果を以下で報告

表3 全国の葉たばこ生産コスト統計

項目	単位	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
生産量	kg/ ムー	134.7	147.9	151.7	143.8	144.0	151.6	141.4	133.7	144.0	135.6	133.4
総コスト	元/ ムー	1454.4	1720.8	1922.2	2099.4	2491.4	3091.3	3451.3	3547.1	3578.6	3673.4	3630.8
物質とサービス費	元/ ムー	606.8	759.7	842.0	821.6	925.3	1029.5	1034.3	1041.3	1034.3	1039.2	1075.2
総コストに占める比率	%	41.7	44.1	43.8	39.1	37.1	33.3	30.0	29.4	28.9	28.3	29.6
人件費	元/ ムー	730.2	818.9	919.1	1086.2	1352.7	1825.4	2139.4	2202.8	2228.4	2318.7	2224.3
総コストに占める比率	%	50.2	47.6	47.8	51.7	54.3	59.0	62.0	62.1	62.3	63.1	61.3
土地コスト	元/ ムー	117.3	142.3	161.2	191.6	213.3	236.5	277.6	303.0	315.9	315.5	331.3
総コストに占める比率	%	8.1	8.3	8.4	9.1	8.6	7.6	8.0	8.5	8.8	8.6	9.1
純利潤	元/ ムー	36.5	319.2	269.2	13.3	59.4	224.5	-37.3	-146.1	278.6	-112.1	-102.2

出所：『全国農産品成本収益資料匯編 2018』による。

する。

徳陽市什邡市は明の時代から有名な葉たばこ産地である。300年以上の葉たばこ栽培の経験に恵まれ、1964～1975年の期間には「特選葉巻」に選ばれていた。さらに1983年に日干種のたばこでは全国で一位に選ばれた。史料によれば1930年代が全盛期で、2万2500トンも生産量されていた。しかし2017年には、年間生産量は8000トン以下である（陳勇等、2017）。一方、宜賓市では2016年に葉たばこ作付面積が7.6万ムーに達しており、葉たばこ生産量は約8110トンである。葉たばこ生産農家の総収入は1.99億元である⁸。

この二つの地域においては、伝統的な零細農家による葉たばこ栽培が中心である。とりわけ什邡市では、年間生産量の約80%以上の葉たばこは平均作付面積が2.4ムー前後の小規模農家によって栽培されているという⁹。2019年1月現在、4戸の大規模農家が他人の土地を借りてそれぞれ65ムー、190ムー、160ムー、100ムーという大規模経営を行っている。

規模によって生産工程や使用する労働力に大きな差があるものの、基本的な生産過程は以下の通りである。

8 四川省農業庁公式サイトより。http://www.scagri.gov.cn/ywdt/szlb/201702/t20170220_502459.html

9 陳勇等（2017）では、農家1戸あたりの作付面積は1600㎡であるとしているが、換算すれば、2.4ムーになる。これは該当地域の一人あたり平均0.8ムーの耕地面積という数値から推測すれば、3人家族の家庭経営面積であろう。

図3 葉たばこ（天日干し品種の場合）生産工程



出所：四川省徳陽市と宜賓市での聞き取り調査により整理。

葉たばこ生産において、大まかに分類すると、以上の図3に示した7つの工程があるが、より詳細に整理すると、①苗用土地整理、②苗植え、③苗に関する中間管理、④移植用土地整理、⑤低い台を作る、⑥移植、⑦膜を履く、⑧追肥2回、⑨草抜き、⑩農薬をまく、⑪頂端の芽を取る、⑫一枚ずつ葉っぱを取る、⑬工房まで運ぶ、⑭棚に干す、⑮葉っぱを伸ばす、⑯等級により選別、⑰束にする、⑱等級によって梱包する、⑲出荷準備作業といった非常に複雑な工程がある。

機械化と品種改良が行われつつあり、手作業から機械に代替されている部分がある。例えば、①と④の土地整理では、現在ほぼすべて機械で土地を耕している。規模を問わず、農家は自分で機械を持つかレンタルするかで1ムーあたり一時間以内で作業を完了することができる。そして、⑩の中間管理の一環である農薬散布作業も一部機械化が進んでいて、無人機を使うケースも見られる。加えて、主にたばこ会社の研究グループが中心となった体制でより抗病力の高い品種を開発し続けている。いずれも技術進歩による規模の経済性を発揮できるとして大いに期待されている。しかし他方で、⑥、⑪、⑫、⑭～⑰の工程は、繊細な作業と選別のノウハウが不可欠であるため、機械で代替されにくい。こうした工程があるため、葉たばこ生産は労働集約度が非常に高い。

(3) 規模別農家の労働力利用現状

経営主体によって栽培時期から栽培のやり方まで大きな違いがある。既存研究では、葉たばこ栽培には1ムーあたり25人・日が必要とされている、という報告がある（焦長権、2018）。今回の調査では、小規模農家1戸、大規模農家2戸の状況を聞き取った。

まず、小規模農家W氏の状況を考察する。W氏は夫婦二人家族で、1995年より葉たばこ栽培を始め、現在宜賓県で葉たばこを20ムーの規模で栽培している。そのうち、3.5ムーだけが自家に割り当てられた土地であり、他は同村の人から借りて作付している。大半は親友から借りているため、地代は1ムーあたり年間200～300円で、相対的に低水準である。しかし、この20ムーは一箇所に集中しておらず、数箇所に散在しているという。他人から土地を借りて経営しているため伝統的な小規模農家ではないが、次のL氏と対比するために、W氏を小規模農家を位置づける。

このW氏が所属する村民小組では以下のように葉たばこ生産が行われている。この小

組に所属する 400 ムーの土地のはほぼすべてでたばこが栽培されている。ただし、土地の貸借が行われており、全ての農家が耕作しているわけではなく、全部で 120 戸ある農家のうち、耕作をしているのは 50 戸であり、空き地はない。そのうち、3～5 ムーの規模で経営している農家は 10 戸、10 ムー前後を経営している農家は 20～30 戸、20 ムーまたそれ以上の農家は 4～6 戸という構造になっている¹⁰。この地域では、葉たばこ栽培で生計を立てることは昔からの伝統であるが、ここ十数年状況が変わってきたと W 氏が語った。その変化の最大な原因は農外就業の増加と農業従事者の高齢化であるという。

表 4 は各作業工程における労働力利用内訳を示しているが、このうち「小規模農家」の列は W 氏の栽培過程に使用された労働力を挙げている。標準工程で挙げられたのはたばこ会社の研究者が出した参考になる労働力の数である。

表 4 各作業工程における規模別農家の労働力利用内訳（1 ムーあたり、単位：人日）

作業工程の内容	標準工程	小規模農家	大規模農家 1	大規模農家 2
育苗	3.5	3	作業委託	作業委託
土地整理*	100 元	1 時間	機械で	機械で
移植	8	4	6	
中間管理	10.4	4	35	
収穫	19	5		2700 円で全ての作業を個別農家に委託
選別	6	4.5		
加工・出荷	2.2	2		

注：土地整理は機械を使うことが奨励されている。「標準工程」での「100 元」とは、トラクターを持つ専門業者に 1 ムー当たり 100 元を支払って土地整理をしてもらうことを意味する。「小規模農家」の「1 時間」とは、専門業者に委託すると 1 ムーあたり 1 時間で作業が終わることを意味する。その作業料金がいくらかは、土地の形状、面積、位置、閑散期か繁忙期かによって決まる。

出所：現地で聞き取り調査より整理。

W 氏の葉たばこ栽培では、基本的に自家労働力に依存しているが、二つだけの段階で短期雇用で近隣の人を雇っている。それらは前掲図 3 に挙げられた「収穫」と「選別」というステップにある⑫一枚ずつ葉っぱを取る作業と、⑯、⑰の等級により選別と束にすることである。全ての工程を合計すると 22 人・日の労働日が必要とされている。たばこの生産が終了してから、7 月～10 月の間に、同じ畑で引き続き落花生の栽培を行うという年間スケジュールになっている。

次は大規模経営の L 氏の事例を考察する。L 氏はすべて借地経営で、100 ムー規模を営営している。土地の地代は 1 ムー当たり年間 1050 元であるが、たばこ会社から規模経営

10 W 氏への聞き取り調査による。

を推進する目的で設置した1000元の補助金をもらっている。L氏本人は1963年生まれで、20年間上海近郊の鉄鋼加工業で経営していた。2017年から自分の出身地である地元に戻り、葉たばこの生産を営み始めた。

前掲表4の「大規模農家1」はL氏の労働力利用状況であるが、先ほどのW氏と比較して各工程での雇用数が多く、合わせて41人・日の労働日が必要とされている。L氏の話によれば、2017年9月から2018年9月一年間で、給料の支払いは40万元であったが、コスト全体の70%くらいを占めたという。

W氏とL氏の事例だけではなく、他の家族経営による葉たばこ栽培農家でも同じく雇用を必要としている。宜賓市の家庭農場の持ち主の羅氏の場合、2017年から500ムーという大規模の土地を借りて葉たばこを栽培している。「葉たばこ+養豚」という複合経営を展開している。「一日少なくとも20人雇うことになり、多い時は60人も同時に雇っていた。一人ひとり毎日3食付きで100元の給料となる。今年払った給料だけで60万元に達した」という¹¹。家庭農場といいながらも実際には大勢の労働者を雇用している。労務管理のために専従の管理者も少なくとも一人いる。

3. 新型農業経営主体をめぐって

ここでは新型農業経営主体のうち、主に家庭農場について論じる。農業部の定義では、新型農業経営主体とは「龍頭企業」(＝農産品加工などを通じて地元の農業を牽引する役割を負う企業)、農業合作社、家庭農場、專業大戸を指している。そのうち家庭農場は2013年の中央一号文件で初めて正式に提起されている。この概念は学術界で議論を引き起こしたが、これは上で述べたように、「家庭経営」に関する議論が多くを占めている。本節では四川省における実地調査で得た資料を利用し、家庭農場の労働力利用の現状について考察したい。

本論文で対象とする邛崃市は、2014年時点の農業人口が40.84万人、農村の人的資源が26.04万人、農業就業者数が12.72万人の規模である。市全体で耕地面積が52.17万ムー、農園は16.15万ムー、林業用地が79.2万ムーある。2014年時点で、農作物の作付面積は120万ムー前後で安定しており、穀物・経済作物やその他の作物が作られている。機械耕作は、のべ130万ムー前後の土地でおこなわれており、灌漑面積は45万ムーである¹²。

新型農業経営主体全体を見ると、成都市級以上の農業産業化龍頭企業が2015年4月時

11 「富了煙農，興了鄉村」という記事に同じく四川省宜賓市の葉たばこ生産農家羅氏の事例を記載している，東方煙草網，2018年9月21日，http://www.eastobacco.com/ycny/yjsh/201809/t20180921_503296.html。

12 2015年の邛崃市統計年鑑による。

点で 39 社ある。その内訳は国家級重点龍頭企業が 3 社、省級重点龍頭企業が 10 社、市級重点龍頭企業が 26 社である。農民の專業合作社は 763 社、農牧業大戸が 700 社あり、職業經營者が 503 人いる。家庭農場は記録されている限り 152 戸あり、そのほか既に登記されているのが 84 戸ある。このうち、四川省および成都市の模範家庭農場の詳細は表 5、表 6 の通りである。

表 5 2015 年邛崃市内の「四川省模範家庭農場」に関する基本状況

農場名称	経営内容	家庭労働力 (人)	長期雇用 (人)	経営面積 (ムー)	年間収入 (万元)
前進棟成	農業・家畜	5	28	779	420
豊興泰園	農業	5	26	247	37
小塘幸福之家	穀物栽培	5	5	108	52
祥和	穀物栽培	4	3	10	7
冉義任氏	穀物、果実、野菜、茶	5	22	152	60

出所：邛崃市農業發展局『2015 年四川省示範家庭農場統計表』

表 6 2015 年邛崃市内の「成都市模範家庭農場」に関する基本状況

農場名称	経営内容	家庭労働力 (人)	長期雇用 (人)	経営面積 (ムー)	年間収入 (万元)
祥禾	農業・家畜	6	15	200	7
華農	家畜	4	10	110	100
国林	キウイフルーツ栽培	3	6	137	185
小塘幸福之家	穀物栽培	5	5	108	10
宏楊	苗木・穀物・果物・野菜	5	12	120	35
川王谷緑地	果物・野菜・製薬原料・観光	5	10	220	30
前進張氏	果物・野菜・観光	5	10	300	28
宏林	キウイフルーツ・果物・野菜・ 観光	6	9	98	20
一畝田	果物・野菜・苗木・観光	5	3	100	15
金華	ブドウ・観光	4	15	120	60
俊中穂風	油料作物	5	15	400	20
緑農果業	果物・野菜・観光	5	3	100	70
古色果香	花卉・果物・野菜	4	2	120	45
志祥	果物・野菜・茶葉・観光	4	6	86	50
玉科	果物・野菜・製薬原料・観光	4	6	300	10
百勝	農業・家畜・観光	4	6	65	160
迪文	穀物栽培	7	4	2500	150
金鵝	農業	6	0	306	120

出所：邛崃市農業發展局『2015 年成都市示範家庭農場統計表』

本論文で使用する調査データは文君街道、臨邛鎮、前進鎮、宝林鎮、冉義鎮、臥竜鎮、桑園鎮の7鎮のものである。本論文ではこれらのデータから、家庭農場の基本状況、家庭農場の労働力利用について分析をおこなう。

(1) 邛崃市における家庭農場の基本的状況

経営パターンについて：今回の調査で、家庭農場の経営パターンを4つに分けた。そのうち「純観光型」と「純牧畜型」は0戸だったが、「農業・観光結合理型」は2戸、「農牧・観光結合理型」が4戸、「農牧結合理型」が6戸、「純農業型」が8戸あった。純農業型の家庭農場の比率が最大であり、純観光型と純牧畜型が見つからなかったことから、邛崃市の家庭農場の経営パターンは農業型と農牧型が主流なことがわかる。また観光型農場は、現在政府が観光農業を全力で進めており、そのため増加傾向にあることもわかった。

農業機械の所有数：今回調査した農場のうち、5台以下の農業機械を所有する農場は11戸あり、農業機械に対して毎年1万元以下の投資をおこなっている農場は10戸あった。このように今回調査した家庭農場は、農業機械所有状況にばらつきが見られた。また全体的に所有率が低く、それらの機械もせいぜい農薬散布用など軽微なものにとどまっていた。

この原因は、以下のいくつかの事情による。一つは、農場ごとに作物の品種が異なっているためである。例えば富農果園、晨陽家庭農場の主な作物は果物と野菜で、それぞれの品種の作付面積が小さいため、大規模な機械化が不可能である。そのため人力に頼って剪定・防虫・収穫をおこなっている。他方、迪文家庭農場の主な作物は小麦と水稻であるため、経営規模が大きく、作付面積が2,500 ムーに達している。そのため収穫・乾燥で大型のコンバインや乾燥機を使うことが可能である。

二つ目の原因として、農場の経営面積の違いもある。例えば迪文家庭農場と興興家庭農場は経営面積が1,000 ムー以上で、農業機械に対する投資も15万元以上である。他方で経営規模が比較的小さい途園家庭農場と百勝家庭農場は、農業機械への投資が1万元にも満たない。

三つ目の原因は、農業機械を単独で購入したり借りたりするには費用が高すぎ、大部分が費用の安い外部委託という方法を選ぶためである。調査した農場のうち、多くのところで整地・収穫を外部委託していた。外部委託では、農場主が時間や項目ごとに作業量を計算して賃金を支払っている。

農場の資金状況：調査対象の農場の資金構成は自己資金が大部分で、親戚・友人からの借金もある。銀行による貸し付けは僅かである。19戸の農場の資金総額は3,587万元で、そのうち自己資金が2833.73万元で全体の79%である。親戚・友人からの借金は466.31万元ある。これは大部分が利息無しだが、一部のところでは年末に配当金の形で利息を

支払っている。銀行による貸し付けは286.72万元しかなく、これは年利0.6%から1%程度である。多くは成都農商銀行による貸し付けである。一部の農場主に聞いたところによると、銀行から貸し付けを受けるには担保が必要だが、農作物現物では担保にならないため、ほとんどの農場主は自らの宅基地以外に銀行が求めるような不動産や固定資産を持たない。そのため農業資産によって貸し付けを受けることが難しい。

(2) 邛崃市の家庭農場における労働力雇用の特徴

農業における人的資源とは、農業部門で農業労働に参加することができる人口の数と質を指すものである。邛崃市の家庭農場の労働力雇用の特徴を考えるために、ここでは農場主と雇用される側の2つの視点から考えてみたい。

上で見た四川省模範家庭農場と成都市模範家庭農場の資料を総合し、実地調査で得たデータを補充すると、邛崃市の一部の家庭農場の労働力使用状況は表7のようになる。このうち、一部の農場のデータは2016年4月から5月におこなった電話インタビューに基づくことを付言しておく。

表7 家庭農場30戸の労働力利用状況

農場名称	経営内容	家庭労働力（人）	長期雇用（人）	短期雇用（人）
途園	野菜	7	0	0-40
榆荷苑	果物・野菜・苗木	4	4	3-10
百勝	果物・家禽類	1	6	0-12
晨陽	果物・野菜・観光	1	34	0-10
富農	果物・観光	5	28	0-10
迪文	穀物・油料作物	7	4	0
興興	穀物・油料作物	1	2	0-78
萍吉	家畜	2	2	2-5
清浅湾	果物・野菜・観光	2	4	0-10
金鵝	野菜	6	0	16
錦園	果物・野菜・観光	5	13	10
祥禾	農業・家畜	2	4	10
祥鳳	果物・観光	3	0	9
山水人	果物・野菜	2	2	15
洪鵬農場	果物・野菜・観光	3	2	50-70
衆友農場	穀物・技術サービス	5	3	50-100
張氏農場	野菜	4	3	70-80
大華農場	果物・観光	3	2	10-30
西郊紫玉	果物・観光	3	5	10-20
臥竜田園	茶葉・花卉	1	10	0-25
小塘幸福之家	穀物	5	6	0-10

農場名称	経営内容	家庭労働力（人）	長期雇用（人）	短期雇用（人）
煌威	穀物・油料作物	5	5	3-9
宏楊	果物・野菜・苗木	5	12	0-12
冉義任氏	穀物・果物・野菜	5	22	0-25
前進棟成	農業・家畜	5	28	8-60
臨邛易林	穀物・果物・野菜	5	20	6-25
緑源地	果物・野菜	4	12	10-30
俏芬芳	花卉	4	8	5-30
華農	家畜	4	10	5-20
俊中穗風	穀物・油料作物	5	15	0-10

注：2015 年から 2016 年にかけて四川省成都邛崃市での聞き取り調査及びアンケート調査による。該当調査は西南财经大学中央高校基本科研費と中国西部経済研究中心の「団体調研費」の支援で行われた。
出所：家庭労働力と長期雇用数は基本的に邛崃市農業発展局『2015 年成都市示範家庭農場統計表』により整理したものであるが、一部現地調査による調整がある。短期雇用人数は現地聞き取り調査による。

表 7 からわかるように、家庭農場の長期雇用数は平均して 6 人で、最多のケースでは 34 人いる。短期雇用数は非常に多い。農場主と被雇用者の状況についてより詳しくは表 8 と表 9 にまとめた。ここではデータが揃った 19 の農場に限定して集計している。

表 8 邛崃市の家庭農場の農場主

項目	分類	頻度	比率（％）
年齢	30 歳以下	0	0
	30-40 歳未満	4	21.0
	40-50 歳未満	8	42.1
	50 歳以上	7	36.8
性別	男	16	84.2
	女	3	15.8
地元の人か	はい	17	89.5
	いいえ	2	10.5
学歴	小学・それ以下	3	15.8
	初中	10	52.6
	高中または中専	6	31.6
	大専・それ以上	0	0
職業経営者か	はい	8	42.1％
	いいえ	11	57.9％

出所：実地調査に基づく

ここから次のことが読みとれる。

第一に、農場主は中高年が主である。30 歳以下はおらず、30～40 歳は 4 人、40～50 歳は 8 人、50 歳以上は 7 人である。つまり、農場主は 40 歳以上が多い。

第二に、男性の農場主が 16 人でほとんどを占めている。

第三に、地元の人が大半を占めており、地元人ではないのは 2 人だけである。そのうち

1人は邛崃市の隣の蒲江県から、もう一人は内蒙古自治区から来たが、成都に住んでいる。

第四に、学歴レベルは一般に低く、小学校卒ないしそれ以下が3人、初中卒が10人、高中卒または中専卒が6人、大専以上はいなかった。学歴は低いものの、ほとんどの農場主は農業生産の熟練した技能と農場管理の知識を持っていることが調査からわかった。加えて農場主は技術と知識を高めることの重要性を認識しており、多くの農場が四川農業大学の専門家を招聘して農場に対する指導を受けている。

第五に、職業経営者の証書を取得する農場が増えてきており、すでに調査した19人のうち8人がこの証書を受けている。まだ証書を取得していない農場主のなかにも試験を受ける予定の者が2人、すでに申請したものが2人、家族が証書を受けたケースが一例、農場の管理者が証書を受けているケースが一例あった。このように職業経営者の証書を取得することがトレンドになっている。職業経営者の証書を受けていることが、農場が政府信用の融資を受けるための資格となっているので、農場経営者は重視しているのである。

この度の調査のなかで、農場経営者に対するアンケート以外に、農業生産に従事する労働者にもアンケートを行った。回収した40人の回答から、調査対象の基本的な状況は表9の通りであった。

表9 邛崃市の家庭農場の被雇用者

項目	分類	頻度	比率 (%)
年齢	30歳以下	5	12.5
	30-40歳未満	6	15.0
	40-50歳未満	5	12.5
	50歳以上	24	60.0
性別	男	20	50.0
	女	20	50.0
地元の人か	はい	38	95.0
	いいえ	2	5.0
学歴	小学・それ以下	15	42.9
	初中	11	31.4
	高中または中専	7	20.0
	大専・それ以上	2	5.7
	NA	5	
雇用期間	長期	24	60.0
	短期	16	40.0
管理職か	はい	5	12.5
	いいえ	35	87.5
職業経営者か	はい	1	2.5
	いいえ	39	97.5

出所：実地調査に基づく

ここから次のことが読みとれる。

第一に、被雇用者も中高年が主である。30歳以下は5人、30-40歳は6人、40～50歳が5人、50歳以上が24人で全体の60%を占める。労働者の高齢化が顕著である。

第二に、性別をみると男女半々ずつである。調査で分かったことは、女性は耕種農業の家庭農場で働くことが多く、年齢が高い。男性は観光農場で働くことが多く、年齢は若く、レストランのコックやウェ이터などをしている。観光農場の収入は高いため、若い就職希望者が集まる。耕種農業の仕事は田畑に入るため、きつく、汚い労働で、かつ雇用期間も短いため、若い人はやりたがらない。

第三に、被雇用者の大多数は地元の人である。調査の中で新しい方法で労働者を集めている農場もあった。例えば宝林鎮の百勝農場は、成都の九眼橋にある労働紹介所を通じて募集情報を流したし、その農場で働く労働者は募集情報をインターネットで知ったという。臥竜鎮の臥竜田園農場は学校を通じて募集を行った。このように農場主は新しい方法を使って労働者を募集し、農場を発展させている。

第四に、労働者の学歴レベルは低い。調査対象者の過半数は初中卒かそれ以下の学歴である。

第五に、長期に雇用されているものが過半数を占めている。特に観光農場のコックや清掃員などは長期雇用である一方、耕種農業での苗の移植、収穫や摘果などの仕事は短期雇用が主である。

第六に、管理職は少なく、調査対象者のうち5人だけである。我々が訪問した家庭農場は中小規模のものが多かったので、農場主とその家族が管理し、専門的管理職が少ないことが多いためである。

第七に、職業経営者は40名の調査対象者のうち1人だけだった。

また、家庭農場では、家族労働力を使ったり、長期や短期の労働者を雇う以外にもう一つ重要な生産方式があり、それは作業の外部委託である。表10に示したように、調査した19の家庭農場のうち13では生産プロセスの一部を外部委託に出していた。委託するプロセスは整地と収穫が多い。特に整地の作業を、機械を保有する外部の業者に委託するこ

表 10 邛崃市の家庭農場の生産プロセス外部委託

外部委託するプロセス	頻度
整地	9
移植	2
収穫	7
枝の手入れ	1
工場建設	1

出所：実地調査による

とは野菜やたばこ栽培でもよく見られることである。外部委託を利用する農場主は、そのほうがより専門的で、より先進的な生産技術を利用できると考えている。委託を利用しない農場主は、現有の労働力で十分に足りているし、農場の規模も小さいし、委託するコストも高いと考えて外部委託を利用しない。

家庭農場は土地の大規模な利用と、農村労働力の活用とに一定程度の積極的な役割を果たし、農村経済の発展と社会の安定に貢献している。土地を集中して経営規模を大きくし、機械を利用し、大規模に作付けすることは、高齢化が進んでいるなかでは、個別の農家で生産するよりも生産効率が高い。家庭農場は、規模の経済性を実現し、誰が農業を担うのかという問題を解決するうえでも効果的である。また、農場が毎年支払う賃金は平均で1農場あたり27万元以上であり、これは農村の余剰労働力に職と収入を与えているし、地元の社会関係と村落共同体の機能も体现しており、農村経済を牽引していることは明らかである。ただ、家庭農場にはこうした積極的な側面がある一方で、家庭農場といってもその実態は「非家庭経営」であること、すなわち土地は大部分は借地で、労働力も大部分被雇用者であることがわかった。つまり現実の家庭農場はその本来の定義、すなわち労働力は家族が主で、雇用する数は労働力総数の半分以上という定義には合致していない。

IV 更なる議論

まず、それぞれの労働力利用の特徴をまとめる。小規模農業経営においては基本的に家族労働力を中心にする点が最大な特徴である。ただし、収穫作業の時期に大量かつ集中的に家族以外の労働力を雇用するケースが多い。この雇用は家族労働の補完的性格を持つといえよう。そして、経営者すなわち家族構成員も雇用した人たちと共に作業をするので、労務管理は一体となり、労働の効率がよく、生産量と商品の品質も良いメリットがあると思われる。

一方、大規模農業経営では土地面積が家族で経営できる範囲を遥かに超えており、外部の労働力の雇用に依存している。中には、「家庭農場」と称しているにも関わらず、完全に「非家族経営」の性格が強く見られるケースもある。それと同時に、規模拡大の目的で積極的に機械化と外部委託などに取り組んでいる。外部の労働力を雇う際の問題点として、農繁期に大人数を雇用する必要があるが、人手の調達が非常に困難であることが挙げられている。

次に、農業生産における労働力利用の現状を調査で踏まえたうえでその原因を分析する。「どのように生産を行っているか」という点を分析すると、自家労働力以外に、伝統

的な穀物栽培などであれば、昔のゆい・手間替え¹³などの形から現金による雇用労働の利用への転換もあるが、冠英鎮のS氏のような生姜栽培の事例、宜賓市で葉たばこ栽培の事例などでみたように、最初から商品生産と市場向けの需要に応じて雇用労働を使うという特徴も現れている。

要するに、農業生産における雇用の需要の増加には以下の二つの異なる背景が存在しているといえる。一つは伝統的な農業生産、主に自給的な稲作がその代表であるが、家族労働力の限界により、雇用需要が生じているという点である。もう一つはより積極的な経営規模拡大や経営多角化問題による労働力雇用の需要の高まりである。前者は、あくまでも自家の稲作生産を完成させるために、雇用労働力を取り入れることであり、従来のゆい・手間替えの作業の賃料化動向と見なすことができる。機械によって人手が代替できるようになるにつれて、このような雇用が次第になくなると予測される。しかし、後者は、完全に市場志向で、その間に労働力の価格や使用する時間などにより細かい条件が見られる。いずれにせよ、雇用労働の使用という点においては、両者とも共通する部分をもっている。すなわち、現在の農業の一部、とりわけ野菜や果物などの労働集約型の経済作物生産には、農業生産の発展に意欲を持つ中小規模農家や新型農業経営主体の主導で50代から70代までの農業労働力が動員されている。

【附記】

本論文は、四川省社会科学规划項目「從產業鍊的角度探究不同類型的農業經營主体的功能和定位」（課題番号 SC15E094）及び西南財經大学中央高校基本科研費「農業規模經營中土地与労働力資源配置方式及効率研究」（課題番号 JBK160169）の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

日本語

- 加藤弘之編（1995）『中国の農村発展と市場化』世界思想社。
金沢夏樹等編（2008）『雇用と農業経営』農林統計協会。
田島俊雄・池上彰英編（2017）『WTO 体制下の中国農業・農村問題』東京大学出版会。
独立行政法人農畜産業振興機構編（2011）『中国野菜産地の変貌』農林統計出版。
九川知雄（2002）『労働市場の地殻変動』名古屋大学出版会。

13 「ゆい」とは田植などの時に互いに力を貸し合うこと。「手間替え」とは労力を出し合うこと。「ゆい・手間替え」は無償労働交換、ボランティア、手伝いなどという意味で農業経営に関する研究の中で使われている。
金沢夏樹等編（2008）、『雇用と農業経営』農林統計協会、11 頁。

中国語

- 陳勇等（2017）「四川什邡雪茄煙的發展現狀与对策」『貴州農業科学』第1期：164-167.
- 黃宗智（1990）『長江三角洲小農家庭与鄉村發展』中華書局.
- 黃宗智（2010）「中国的隱性農業革命」『中国鄉村研究』（第8期）福建教育出版社.
- 黃宗智（2014）「“家庭農場”是中国農業的發展出路嗎？」『開放時代』第2期：176-194+9.
- 高強・劉同山・孔祥智（2013）「家庭農場的制度解析：特徵，發生機制与效应」『經濟学家』第6期：48-56.
- 高強・周振・孔祥智（2014）「家庭農場的實踐界定，資格条件与登記管理——基于政策分析的視角」『農業經濟問題』第9期：11-18+110.
- 郭熙保・馮玲玲（2015）「家庭農場規模的決定因素分析：理論与実証」『中国農村經濟』第5期：82-95.
- 焦長權（2018）「從過密化到資本化：新農業到新農民——以湖北省恩施市煙葉種植農戶為例的討論」『中国鄉村研究』第1期：343-373.
- 林毅夫（2008）『制度，技術与中国農業發展』（第3版）上海人民出版社.
- 羅必良（2017）「論服務規模經營——從縱向分工到橫向分工及連片專業化」『中国農村經濟』第11期：2-16.
- 尚旭東・朱守銀（2015）「家庭農場和專業農戶大規模農地的“非家庭經營”：行為邏輯、經營成效与政策偏離」『中国農村經濟』第12期：4-13+30.
- 袁賽男（2013）「家庭農場：我国農業現代化進路選抉——基于家庭農場与傳統小農戶，雇工制農場的比較」『長白學刊』第4期：92-97.
- 趙佳・姜長雲（2015）「兼業小農抑或家庭農場——中国農業家庭經營組織變遷的路径選抉」『農業經濟問題』第3期：11-18+110.
- 中華人民共和國農業部編『新中国60年農業統計資料』中国農業出版社，2009.
- 朱啓臻・胡鵬輝・許漢沢（2014）「論家庭農場：優勢，条件与規模」『農業經濟問題』第7期：11-17+110.